『聊斎志異』の冥界

今　井　弘　昌
文化創造学部文化創造学科
（2009年９月25日受理）

The Underworld of *Liao Zhai Zhi Yi*

Faculty of Cultural Development, Department of Cultural Development,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan（〒501－2592）

IMAI Hiromasa
（Received September 25, 2009）

Ⅰ．はじめに

『聊斎志異』は清初の文人蒲松齢が著した短編小説集であり，怪異文学の最高峰を示す作品として，文学史の中に位置づけられている。

作者の蒲松齢（1640–1715）は明末，山東省淄川県に生まれ，動乱の中で成長した。生家の蒲家は元代以来の名家で，先祖が官界での立身出世をめざし学業に励んだように，蒲松齢も官吏登用試験である科挙に挑んだ。予備試験である県試，府試，院試には優秀な成績で合格したが，本番の郷試には合格しなかった。生活はしだいに苦しくなり，同郷人の家塾の教師となって糊口をしのいだ。教師生活は七十歳になるまで続き，官界へ出る夢はついに叶わなかった。

『聊斎志異』の「聊斎」は，蒲松齢の書斎の名で，「志異」は異（ふしぎ）をしるす，すなわち幽霊や妖怪変化など，怪異をしるしたものということである。執筆の動機について，蒲松齢は『聊斎志異』の序文に当たる「聊斎自誌」で次のように述べている。

披蘿帯荔，三閭氏感而為騒；牛鬼蛇神，長爪郎吟而成癖。自鳴天籟，不擇好音，有由然矣。松落落秋螢之火，魑魅爭光；逐逐野馬之塵，罔両見笑。才非干寳，雅愛搜神，情類黄州，喜人談鬼。聞則命筆，遂以成編[1]。

三閭氏（屈原）は蘿を羽織り，香草を帯にした神に感じて「離騒」を書き，長爪郎（李賀）は牛鬼や蛇神を詩に詠み，病みつきになった。それらは自然に奏でられた調べであり，詩人が意図したものではなく，自ずからそうなったのである。私は秋の蛍火のように哀れな身であり，魑魅と光を争おうとしているが，はかないかげろうに過ぎず，魍魎にも笑われるだろう。干宝のような才能もないのに，もともと神怪を捜すのを好み，黄州知事（蘇軾）と同じように人々が幽鬼について語るのを喜ぶのである。そうした話を聞くと，すぐ筆をとり一編にまとめる。

獨是子夜熒熒，燈昏欲蕊；蕭齋瑟瑟，案冷疑冰。集腋為裘，妄續幽冥之録；浮白載筆，僅成孤憤之書。寄託如此，亦足悲

矣。嗟乎，驚霜寒雀，抱樹無温；弔月秋蟲，偎闌自熱。知我者，其在青林黒塞間乎。

深夜一人，灯は消えかかって暗く，寂しい書斎に隙間風が吹き，机は冷え，氷かと疑う。狐の腋毛を集めて皮衣を作るように，話を集めて『幽明録』の跡を継ごうとし，杯に酒を浮かべて筆を取り，ようやく「孤憤」の書を書き上げた。このように心の内をこの書に託したが，何と悲しいことか。ああ，霜に驚く冬の雀は樹を抱いても温かくなれない。月に向かって鳴く秋の虫は手すりに身を寄せ暖を取ろうとする。私を知ってくれるものは，奥深い林の暗闇の中にいるものたちではないだろうか。

「孤憤」の書とは，官界に雄飛する夢が叶わぬ状況に対する憤懣の書ということであろう。『聊斎志異』は「鬼狐伝」とも言われるように，幽鬼や狐を扱った物語が大きな部分を占めている。五百篇近い話のうち，幽鬼についての話が八十余篇，狐に関する話が七十余篇ある。蒲松齢は，人々が語る怪異を集め，それを流麗な文体で物語として再構成した。そこでは幽鬼や狐，神仙などの形象を通して，社会，官僚機構，風俗，人情に対する作者の憤りが表わされている。

本稿は『聊斎志異』の中に描かれた冥界の姿を分析し，その特徴を明らかにすることを目的とする。

Ⅱ．現世と冥界の往来

この世からあの世へ，または，あの世からこの世へというように，時間的，空間的に二つの世界にまたがって物語が語られるとき，「幽明異路」，あるいはそれと同様の意味の言葉が用いられる。「幽明異路」とは，この世とあの世では住む世界が異なることを意味する。生者と死者は，まったく別の世界に属するものだという考えである。

人鬼殊途，何能相依？（巻二「珠兒」）
人間とあの世のものとでは途が違う。どうして寄り合えよう。

幽明殊途，安能代庖？（巻四「鬼作筵」）
あの世とこの世とはまったく違った世界です。料理の代理などできるはずもありません。

所以不見者，以幽明異路。（巻十二「元少先生」）
お会いしなかったのは，幽明境を異にしているからです。

ところが，実際に話をたどってみると，原則は簡単に破られる。例として，巻二「珠兒」を見てみる。

常州の民，李化には珠兒という名の男児がいた。しかし，他人の生殺禍福を思いのままに操るといわれる，怪しげな僧に布施を出さなかったため，珠兒は病に罹り死んでしまった。この事態を県知事に訴え出ると，知事は僧を捕えて，杖刑に処して殺した。その日の夕方，家に戻ると見知らぬ子どもが，突然部屋に入ってきて，李をお父さん，お父さんと呼んであとを追う。李が驚いて問い質すと，この子どもは，前述の僧に欺かれて殺されてしまった幽鬼だった。そして，どうか李夫婦の子どもにしてほしいと懇願する。それに対して，李は前掲のように「人間とあの世のものとでは途が違う」と言ってことわる。しかし，

兒曰，但除斗室，為兒設牀褥，日澆一杯

冷漿粥，餘都無事。李從之。兒喜，遂獨臥室中。

子どもが，「部屋を掃除してぼくのために寝台と蒲団を用意し，一日に冷たいお粥を一杯くれれば，あとは何もいらない」というので，李はそうすることにした。子どもは喜び，ひとりで部屋に寝た。

と子どもの要求通りにして，一緒に暮し始めるのである。いとも簡単に二つの世界が行き来される。これは人間が日常の世界を営む世界に，冥界から幽鬼が入り込んできた例である。反対に，人間が冥界に向かう例（前掲の巻四「鬼作筵」）を次に見てみる。

杜九畹の妻は病に臥せっていた。旧暦の九月九日の節句に，茱萸会に出かけようと杜が支度をしていると，妻が突然意識を失った。そして亡くなった杜の父親の口調で，急に能弁になって話し始めた。杜は幽鬼にとり憑かれたかと恐る恐る妻の話に耳を傾けた。すると，亡くなった父の幽鬼は，死に瀕した杜の妻を生き延びさせるため，冥界から迎えに来た鬼卒に心付けを渡して，ご馳走すると約束したので，嫁に料理作りに冥界へ来てもらいたい，という。これに対し杜は，前掲のように「あの世とこの世とはまったく違った世界です」と答えてことわる。しかし，妻は三日後，再び人事不省に陥り，意識を回復すると，次のように語った。

適阿翁呼我去，謂曰，不用爾操作，我烹調自有人，祇須堅坐指揮足矣。我冥中喜豊満，諸物饌都覆器外，切宜記之。我諾。至厨下，見二婦操刀砧於中，俱紺帔而緑縁之。呼我以嫂。毎盛炙於簋，必請覘視。曩四人都在筵中。進饌既畢，酒具已列器中。翁乃命我還。

さっきお父さんが私を呼んで連れて行きました。お父さんは，「調理する者がいるから，お前は働く必要はない，ただ坐って指図するだけでいい。冥界では豊かなことを好むから，どの料理も食器にあふれるくらい盛るのだ，よく覚えておけ」とおっしゃいました。私は承知して台所へ行くと，そこでは二人の女性が庖丁をふるっていました。二人とも緑の縁取りのある紺の着物を着ていて，私のことを嫂さんと呼びました。食器に料理を盛るたびに，必ず見るように言いました。いつかの四人はみな宴席にいました。料理を運び，酒の道具を並べると，お父さんは帰るように言いました。

これらの話は，人間と幽鬼は別々の世界に住むものだとの認識を持ちながら，現世と冥界の往来がなされていることを示している。「幽明異路」の原則を犯して，生者が死者の世界へ，または死者が生者の世界へ踏み込んでも，秩序が大きく崩れることはない。再び各々の存在すべき世界に戻って，生の国と死の国の調和が回復されるのである。この意味において，「幽明異路」は絶対的な禁忌ではなくて，融通性に富んだものであり，生と死の世界を明確に区切りながら，同時に繋げる働きをもった言葉だといえる。

Ⅲ．冥界のイメージ

ここでは，人間が足を踏み入れた冥界が，どのようなところとして表されているか，巻五「伍秋月」と巻三「李伯言」の例を見ていく。

まず巻五「伍秋月」の冥界を見る。秦郵に王鼎という若者がいた。彼は旅に出て，長江のほとりの鎮江の街で，伍秋月と名乗る十四，五の娘と知り合った。秋月は三十年前に若死にした幽鬼だったが，二人はすぐに仲睦まじ

くなり，深い関係を結んだ。ある夜，明月が冴え渡る中，庭を散歩していてこんな会話を交した。

> 問女，冥中亦有城郭否。答曰，等耳。冥間城府，不在此處，去此可三四里。但以夜為晝。問，生人能見之否。答云，亦可。
> 女に「冥土にも城郭はあるのか」と尋ねると，こう答えた。「同じよ。冥界の城府は，ここにはなくて，ここから三，四里ほど離れたところよ。ただこちらの夜が，向うでは昼になっているの。」「生きている人にも見られるのか」と聞くと，「見られるわ」と答えた。

そして，二人は問題の場所に赴く。最初王には何も見えなかったので，秋月は唾を王の両方の眦に塗ってくれた。

> 啓之，明倍於常，視夜色不殊白晝。頓見雉堞在杳靄中，路上行人，如趨墟市。
> 目を開けると，いつもの倍もよく見え，夜景が白昼のように目に映った。城壁の上の姫垣が深い靄の中に見え，路上を行く人は，市場へ向かうかのようだった。

冥界は，この大地と地続きのどこかに存在するが，普通の人間にはその世界を見通すことはできない。そこでは夜と昼が逆転している。また，現世と同じように城壁に囲まれた街があり，日々の生活が営まれている。地球の裏側を覗いてみたのだろうか，と錯覚するような記述である。つまり，冥界においても現世と特に変わらぬ地平が広がっている，と考えられているのである。

さらに巻三「李伯言」は，冥府からの拘引が絶対的な理に基づくものではなく，員数合わせなどの冥界の事情，または誤認その他によって比較的容易に変更ができることを物語る話である。

沂水に住む主人公の李伯言は，急病であっけなく死んでしまう。が，それは冥界の役人に欠員が生じたので，しばらくの間代理を務めるためだった。彼は冥土の庁の閻魔として，冥界の法律に則り，白洲や銅柱，鉄棒といった責め道具が，現世と同様にそろった中で審議を進める。罪人が李の姻戚だったので，手心を加えてやろうと考えるや，殿上に突然火の手があがり，焔が棟や梁を焼く。すると，役人の一人の口から，「冥土の獄官は，人間の世とは違って，これっぱかりも私心を容れるわけにはまいりませぬ。早々にあらぬ想いをぬぐわれれば，火はおのずから熄みます」と戒めの言葉が発せられる。李は思い直して公正な裁きを心がけ，実情を糾明して笞刑を宣告した。罪人の方は刑罰を受けた後，三日ほどして蘇生した。が，笞を受けたあとの瘡が膿んで，その跡が，生き返ったのちもはっきりと残ったのだった。

この主人公が現世から冥界に入っていく場面を見てみる。

> 忽暴病，家人進薬，卻之曰，吾病非薬餌可療。陰司閻羅缺，欲吾暫攝其篆耳。死勿埋我，宜待之。是日果死。騶從導去，入一宮殿，進冕服，隷胥祗候甚肅。案上簿書叢沓。
> 突然病に罹り，家人が薬をすすめたが，それをしりぞけて，「私の病気は薬では治せない。冥土の庁の閻魔が欠けたので，私にしばらくその印璽を帯びてほしいというだけのことだ。死んでも埋葬してはいけない，待っているがいい」といい，その日果たして死んだ。供回りの騎馬の者が案内して，ある宮殿に入り，冠や服を持って来た。配下の役人たちが，いと

も厳かに控えている。卓上には帳簿と書類が山をなしていた。

死を迎えた主人公が，次の場面では既に冥府に来ている。そして，彼の眼を通した冥府の様子が描写される。供回りの者，宮殿，冠，服，役人，帳簿，書類等々。冥府の描写の中には，非現実的な，この世ならぬ世界であることを感じさせるものはない。現実に存在する官僚の社会に見出されるものが，そのまま「冥界の」という形容詞をつけて，向こう側の世界にも広がっている。さらにまた，冥界から現世へ戻ってくる場面では，

至家騶従都去，李乃甦。
家へ帰り着くと，供回りの騎馬の者はみな立ち去って，李は甦った。

と非常に簡潔であっけない。現世，冥界をそれぞれくっきりと際立たせる質的な差異が存在しない。現世と冥界の間が断絶し，各々がまったく異質な世界を形成しているわけではない。「幽明異路」がつなぎ目になり，生前と死後は左右対称に，ほとんど等質な世界として広がっているのである。現世に存在する官僚機構や役人が，冥界にも存在する。現実に見出しうる情景が，死後の世界にも広がっている。換言すれば，人間は死後，現世同様に，幽鬼としての生活を冥界においても営むと考えられているのである。

Ⅳ．冥界の裁き

幽鬼にとって，冥界の裁きは，死後の世界でどのような生活を送るかを決定づける非常に重要なものといえる。それによって地獄に落ちたり，異類（人以外の生物）にされたり，あるいは安定した地位を約束されたりするのであるから，切実な関心事だったのである。以下，幽鬼が冥界での生活を始める前に受ける裁きについて明らかにしていく。まず，巻十「席方平」の例を見る。

主人公は東安に住む席方平という青年である。彼は，亡くなった父の廉が，隣人の素封家，羊の奸計にひっかかって，冥府において無実の罪で仕置きを受けている姿を夢に見る。そして，父を救うため冥界に乗り込む。城隍神，府知事，県知事に対して父の冤罪を申し立てたが，いずれも羊が先に賄賂を贈っていたため，取り上げられない。席は諦めず，府知事と県知事の不正を閻魔に訴えた。が既に，閻魔も両知事からの賄賂に買収されており，逆に席を地獄に落して，様々な責め苦にあわせて，訴えを取り下げさせようとする。過酷な刑にも屈しない席の父を思う心に感じて，鬼卒たちは手加減を加える。その後彼は赤ん坊に生まれ変わらせられるが，乳を飲もうとせず，三日で再び冥界へ戻る。そしてやっとのことで，上帝の第九親王への直訴がかない，閻魔以下冥吏たちの不正が暴露され，彼らは厳罰に処せられる。一方，父の無罪は証され，さらに席の実直さと孝心が評価されて，父子各々寿命を三十年ずつ延ばされ，現世に生き返り幸福に暮した。

死に臨んだ人間の裁き手は，冥府の官吏である。彼らは現世の官僚をそのまま冥界に移行させた形象で，城隍神，府知事，県知事，閻魔……と冥吏の官位の上下が明確に定まっている。そして，冥府の最高位に君臨する上帝も，冥界の機構を超越した絶対的な存在ではない。冥界での裁きは，その人間が現世をどう生きたか，すなわち彼の言動，信条，思想などと本質的に無関係な冥吏の側の思惑によるものとなる。冥吏が義を持てば裁きは公明正大が心がけられ，そうでなければ冤罪に泣く，相対的なものである。賄賂，不正が横行する現世の裁判と同様である。

『聊斎志異』の中には「席方平」のほかにも，冥界における裁きが主題になった話がある。巻七「冤獄」，巻九「郭安」，巻十一「王十」である。「冤獄」の「異史氏曰」[2]には

> 訟獄乃居官之首務，培陰隲，滅天理，皆在於此，不可不愼也。
> 裁判は役人の最も大切な任務であり，陰徳を養うのも，良心にそむく行為をするのも，みなここにある。くれぐれも慎まなければならぬ。

とあり，蒲松齢自身も評語を挟んでいる。

裁きを行う閻魔以下の冥吏たちには，その地位にふさわしい倫理道徳的潔癖性や正義感などが期待された。しかし，私心を交えた裁きもあり得るという考え方は動かし難く存在している。裁きを受ける側は，現世での言動がどのように評価され，判決に結びつけられるか，恐れを抱きつつ，結局は，運がよければうまくいくだろうし，そうでなければ……と考えるにとどまる。裁かれる自己自身の内面を突き詰めて考えることはせず，心から納得できるかどうかについては保留したまま，冥吏の下す裁きを受け入れるのである。死後には生前と変わらぬ地平が広がっているとして，現世と冥界を連続的に捉える死生観は，運命や裁きを，動かし難い絶対的なものではなく，相対的なものとして捉える考え方と深く結びついている。死に臨んだ人間を裁くのは，冥吏であり，彼は現世の役人を引きうつした形でイメージされている。つまり，冥界の裁き手も冥界を生きる一役人であり，異議をさしはさむ余地のない正当な裁きを行うこともあれば，理不尽な判決を下すこともあり得る。

冥界は本来日常から離れたところにあるものである。そこでは現世の様々な束縛を離れ，想像力を自由に羽ばたかせることができる。現世の理不尽な裁きを弾劾するため，蒲松齢は冥界という場を借りた。冥界という場を借り，心おきなく自分の考えを述べているが，現世と冥界を連続的に捉える死生観に基づく民間説話という形にすることによって，物語をリアルなものにし，批判を力強くすることができたのである。

Ⅴ．孤鬼

冥界での生活を可能にするものは，祖先祭祀である。遺族や子孫は死者のために紙銭を焚いて冥界へ送金し[3]，供物を捧げて食を保障する義務を負う。とはいっても，すべての幽鬼が，金銭や食べ物を送ってくれる子孫を持つわけではない。子孫による支えのない，不安定な死後の生活を強いられた幽鬼は,「孤鬼」と呼ばれた。ここでは，現世の延長としてイメージされる冥界をゆるがす可能性を持つ孤鬼について見ていく。

死後祭ってくれる子孫が存在する幽鬼にとっては，現世の延長としての死後を迎えることに，特に問題はない。だが，孤鬼には死後，過酷な生活が運命づけられている。冥界を信じる人々は，自らが孤鬼に身を落とさないことを切実に願いながらも，孤鬼にならざるを得ない人間が出てくること，つまり孤鬼が確実に存在することを認識していた。そして，生から死への，安定した環の内部に属する者たちへ向ける孤鬼の視線を，強烈に意識せざるを得なかった。つまり，孤鬼のなす祟りを恐懼したのである。孤鬼は，祖先祭祀によって初めて保障される冥界の論理から排斥された形象である。そのため血縁によって成立する閉ざされた環を破壊する，最も脅威的な存在と考えられたのである。

さて，孤鬼の描かれ方を見ると，人間との恋愛，飢え，身代わりといった題材が主であ

る。ここでは，恋愛物語の中の孤鬼を見ていく。

幽鬼の物語には，人間の男性と幽鬼の女性の間に芽生えた恋愛の話が数多く存在する。その中で典型的な恋は，プラトニックな関係ではなく，交歓し子をなす類のものである。子が両者の愛の証として，また幸福を掴んだことの証明として重要視されるているのは，子孫を残すことによって幽鬼の死後の生活が保障されることになるからであろう。死後祀ってくれる子孫が存在しない孤鬼は，子孫がいないからこそ一層切実に，人間との交わりを求めたと考えられる。

中国の女性にとって，生家の祖墳は縁のないものであり，既婚者として夫の家の祖墳に葬られる以外には，女性が祖墳に入ることはできない。したがって，未婚の娘や離縁されて生家に戻った娘が生家で死ぬと，家族はその処置に困惑する。つまり，婚姻が成立していない女性は，誰からも祀られることがないのである。

このように，祀る者がいない孤鬼が，未婚の女性の中に生ずる可能性が大きいことを反映して，『聊斎志異』に登場する孤鬼も，若い女性が主である。

巻二「聶小倩」の女主人公小倩は，十八歳で若死にして，生家の墓ではなく，朽ちた寺の傍らに葬られた。並ぶ者がなかろうと思われるほど美しい小倩は，妖怪に脅されて，荒れ果てた僧坊を一夜の宿とした旅人を，次々と誘惑して，錐で足を刺し血を取り，命を奪っていた。ある日甯采臣という一人の若者がこの寺に旅装を解く。品行方正な彼は，小倩の誘惑に乗らず，彼女から，孤鬼としての悲しくあさましい生業を打ち明けられた。そして小倩の助言に助けられて，夜叉から身を守ることができたので，感謝をこめて，彼女の遺骨を自分の家の近隣に手厚く葬ってやった。

彼女が甯采臣に自分の骨を掘り返し，適当な場所に葬りなおしてほしいと懇願する場面を，原文では，

> 臨別泣曰，妾堕玄海，求岸不得。郎君義気干雲，必能拔生救苦。倘肯囊妾朽骨，帰葬安宅，不啻再造。甯毅然諾之。因問葬処，曰，但記取白楊之上有烏巣者是也。言已出門，紛然而滅。
>
> 別れ際に泣きながら言うには，「私は無明の海に堕ち，岸を探しあてられないでいます。あなたが発する正義の気は雲を凌ぐほどですから，きっとこの苦しみから助け出してくださることがおできになります。もし，私の朽ちた骨を嚢に納め，故里へ持ち帰って安住の地へ葬ることをご承知いただけますなら，再生のご恩どころではございません。」甯采臣は毅然としてこれを快諾した。そこで葬られている場所を問うと，「ただ白楊のほとり，烏の巣のあるところがそこ，と覚えていてください」と言うや，戸口を出て行き，煙のように消え失せてしまった。

と描写している。蓬をはじめ，種々の野草が人の背丈を隠すほどに伸び放題になり，足跡も絶えたような幽寂とした寺が舞台である。そこに艶やかに美しい孤鬼の娘が棲む。この寺と幽鬼の対照が鮮明に浮かび上がり，小倩の置かれた境遇が一層哀れに感じられてくる。これは作者蒲松齢の筆の冴えもさることながら，引用した箇所に見られるように，「妾堕玄海，求岸不得」の悲鳴そのものが，無視し得ない深刻さを持って迫ってくるからではないだろうか。

物語はその後，小倩との約束を誠実に果たした甯采臣とその家族に，小倩が一生懸命に仕えるという形で展開する。初めは幽鬼だと

恐がっていた彼の母も，陰日向なく働く小倩が気に入って，寝起きを共にするようになった。かねて病に臥せっていた，采臣の妻がみまかると，遂に小倩を嫁として迎える。が，この期に及んでも，母は亡くなった嫁との間に子がなく，幽鬼の妻を娶って血筋が絶えることを案じる。それに対して小倩は，

> 子女惟天所授。郎君註福籍，有亢宗子三，不以鬼妻而遂奪也。
> 子どもは天からの授かりものです。あの方は幸福の籍に書きこまれていて，ご先祖の名を揚げるお子が三人おありになることになっています。幽鬼の妻だからといって，それが取り消されることはありません。

と説得する。数年後，甯采臣は進士に及第し，小倩は一男をもうける。さらに息子の正妻と妾がそれぞれ一男を産み，皆官途につき，一族は幸せに暮した，という。

冥界を生きながらえていくために人を害していた孤鬼が，人間と婚姻を結び，子をなして，祖先から自身を経て，子孫へと続いていく環の中に組み込まれることに成功したのである。その際，「郎君註福籍」が「不以鬼妻而遂奪也」であることが重要である。もしも小倩が幽鬼であるがゆえに甯采臣の子を産むことができないとされていたら，甯采臣の母は小倩を嫁に迎えることに同意しないだろう。したがって小倩は孤鬼の境遇を抜け出ることができず，恋愛も悲劇的な結末を迎えることになる。

孤鬼と人間の恋愛では，生から死への安定した移行を脅かす可能性を持つ孤鬼を，再度血族の連鎖に連なる存在に変えることに主眼が置かれている。これは孤鬼救済の現実的方法だといえる。同時にそれは，孤鬼によって人間界にもたらされる災いを防ぐことになる。

このように孤鬼と人間の恋は，美しく不遇の幽鬼と，情の厚い男との間ではぐくまれるのが大半で，例外はほとんどない。そして生から死へ，人から幽鬼へ，さらに人として再生へと続く環から外へ放逐されてしまった孤鬼が，人間との愛を成就させて環に復帰する。孤鬼となる恐怖が共有されているため，蒲松齢が描く愛の物語は切実であり，共感を呼ぶ。孤鬼はその境遇から抜け出るために必死であるが，決して利己的ではない。心優しく，献身的ですらある。孤鬼の境遇は悲惨なものであるが，現世の様々な束縛から自由であり，愛を求めてひたむきに突き進む。それが作者の共感する愛の形であるかのように，孤鬼を描く作者の筆は冴える。人々の観念の中にはあるが，現実の存在ではない孤鬼という形を借りて，作者は想像力を羽ばたかせている。

とはいえ，美しい物語は，あくまでも物語であって現実ではない。子孫に祀られて，快適な幽鬼の生活を送ることが可能な者が存在する一方で，孤鬼が消滅することはあり得ず，永久に再生産し続けられる。死後自らが孤鬼になってしまうことは非常に恐ろしい。更にまた，飢えた悲惨な孤鬼の怨念が，現在の生活を破壊するのではないかと恐れる。いわば，二重に孤鬼の影に怯えているのである。逆説的に言えば，宗族共同体の結束を固めていくためには，孤鬼の存在が非常に重要だったともいえる。孤鬼は見せしめとしての効果を果たし，孤鬼になりたくないがため，ますます嗣子の誕生が待望されるようになる。血縁によって宗族共同体に連なるか，孤鬼となるかが，二律背反的に考えられているのである。人間は，生前のみならず，死後の世界においても，宗族共同体の中ではじめて生活を営むことができると考えられた。祖先祭祀が子孫

によって欠かさず執り行われることにより，幽鬼の生活は保障されるのである。

Ⅵ．終わりに

本稿は，幽鬼の物語を分析することによって，『聊斎志異』の中に描かれた冥界の特徴を明らかにすることをめざしてきた。

文学的には顧みるに値しないとされながらも，時代を越えて命数を保ってきた幽鬼の物語は，幽鬼の世界に生きた人々の生と死に対する考え方を伝えている。物語の中に現われる幽鬼は，「幽明異路」の原則を踏み越えて，人間の世界に入り込んでくる。そして人間もまた，幽鬼の住む向こう側の世界に飛び込んでいく。これら幽鬼の物語に現われた死生観の特徴は何か。それは生前と死後，現世と冥界を異質な世界として，断絶していると捉えるのではなく，等質な世界として，連続しているのだと考えていることである。幽鬼は語る。死後の世界には，現実と質的に異なる地平は存在していないのだと。死後にも幽鬼としての生活があるのだから，そのための準備を心がけることが大切だと。最も大切な準備は，宗族の血統を維持し，子孫を残すことである。血族の連瑣と循環的死生観は表裏一体をなすものだと考えられる。視点を変えれば，中国の伝統社会の中で，宗族の紐帯がいかに重要なものとされていたかを，幽鬼に見られる死生観は表わしている，といえる。循環的死生観が抱える最大の問題は，宗族の紐帯の中でしか自己の生涯の存在意義と死に臨んでの慰めを見出し得ないことである。したがって宗族社会の中に自己の位置を確保できなかった人間は，必然的に救いのない死を迎えることになる。孤鬼として，苛酷な死後の生活を余儀なくされるのである。幽鬼の世界の死生観を胚胎させているものは，宗族の紐帯の維持によって，人間は生きることができるのだ，という論理であるといえよう。

注

1）テキストは張友鶴輯校『聊斎志異　会校会注会評本』（上海古籍出版社，1986）を使用した。

2）「異史氏曰」は，作者蒲松齢が所々に挟んだコメントの部分で，司馬遷の『史記』に付した評語（「太史公曰」）にならったものである。

3）紙銭を焚いて冥土へ送金するという習慣は，現在の中国でも行われている。二階堂善弘『中国妖怪伝』（平凡社，2003年３月）によれば，紙銭には金箔や銀箔をほどこしたものが多いが，現代のお札風のものも使われるという。現代風のお札には「冥通銀行発行」と書いてあって，額面「一千億」のお札もあるということである。

参考文献

1）稲田孝『聊斎志異　玩世と怪異の覗きからくり』，講談社，1994

2）澤田瑞穂『地獄変』，平河出版社，1991

3）澤田瑞穂『修訂　鬼趣談義』，平河出版社，1990

4）竹田晃『中国の悪霊』，東京大学出版会，1980

5）二階堂善弘『中国妖怪伝』，平凡社，2003

6）辜美高・王枝忠［編］『国際聊斎論文集』，北京師範大学出版社，1992

7）黄洽『聊斎志異與宗教文化』，齊魯書社，2005

8）徐文軍『聊斎風俗文化論』，齊魯書社，2008

9）于天池『蒲松齢與聊斎志異』，北京師範大学出版社，1993

10）張友鶴［輯校］『聊斎志異　会校会注会

評本』，上海古籍出版社，1986